

出席者 8 名 (全員日本人)

【テーマ 1】「第 4 回関西スペイン語教師の集い」(2 月 10 日実施) で扱ったテーマのふりかえり

「集い」の欠席者への内容説明を小川が行い、今回の例会の出席者が適宜内容についてコメントをした。Taller 3, Taller 4 の内容については活発な話し合いになったので、やや詳述する。

1 「情報通信技術を利用して教室外で行うスペイン語学習」(担当: Paz Prieto Martín)

関連サイト (<http://bit.ly/V60ymq>) にアクセスし、そこで紹介されているスペイン語関係の映像を見た。

2 「大きな声ではっきりと」(担当: 磯野吉美)

当日出席者らで行ったこと(呼吸、発声練習など)の報告をした。

3 「西作文の採点について」(担当: 小山朋子)

小山さんの実施報告(TADESKA ホームページに記載予定)を見ながら話し合った。テストにおける和文西訳の採点方法でネイティブ教員と日本人教員の間に違いが見られたことについて、「文全体で意味が通じるかどうか」「語や語の組合せの単位での誤りに対して減点するか」という違いがクローズアップされた。「文全体で意味が通じるか」という基準については、特に、次の例文の採点の困難さが指摘された。

問題文「この赤い携帯電話は私の妹のものです。」

正答: Este móvil rojo es de mi hermana menor.

誤答の例: 1) Este móvil rojo es mi hermana menor. (前置詞 de の脱落)

2) Este móvil azul es de mi hermana menor.

(語彙「赤」「青」の選択ミス)

3) Este móvil rojo es de mi hermano menor.

(語彙「妹」「弟」の選択もしくは表記ミス)

誤解を導くようなエラーを「0 点」とした場合、発話状況における話し手と聞き手の前提知識、常識的判断が「誤解」の有無の基準となるであろう。しかし、発話状況が不明である以上明快な基準を設けにくい。1) の場合、字義的には「携帯電話=人間」となるが、常識的にありえないので、聞き手は de が脱落したものとみなし、誤解は生じに

くいと思われる。2) は実物を指さしているならば色の言い間違いであるとみなされるだろうが、すぐそばにある「青い携帯」と区別するために「赤い」と言っているならば、誤解の恐れがある。3) は、聞き手が、話し手に妹がいると知っているかいないかで、誤解が生じるかエラーと解釈されるか判断が分かれるだろう。

スペイン語表現としての適切さの判断方法そのものより重要なことは、試験作成者が何を狙いとしてその問題文を作成したかということと、採点中に答案によって基準がぶれないことである。判断基準に迷いを持ちながら採点する時には、答案用紙を見比べて、採点において不公平が生じないように留意しなければならない、という点において、出席者が同意した。

(小川の感想：ネイティブ教員は、テストの答案であっても「発話文」としてトップダウンで見ると一方、日本人教員は、要素としての語の表出およびそれらの結合としてボトムアップで見ている、と言えるのではないだろうか。私はこれらを折衷した採点方法にしているが、判断にぶれが生じないように、さらに検討したい。)

4 「ネイティブ講師と日本人講師による同一教科書を使用した授業をよりよいものにするために」(担当：坂巻素子、Santiago López Jara)

同じクラス(同じ学生のグループ)で授業を週2回、2人の講師が担当する場合、どこまでどのようにコーディネートするのが望ましいか、またコーディネートがある場合どのような利点や問題点があるかについて、坂巻さん、Santiagoさん作成の実施報告を見ながら話し合った。かつては、多くの大学では授業方法を各担当教員に一任していたので、非常勤講師らは、自分のお気に入りの教科書を異なる大学で使って好きなように授業をすることが多かった。しかし、近年は、受講生の学習負担を軽減して授業効果を上げるため、コーディネートが行われることが多くなってきた。「集い」の時と同様、意見が分かれ結論は出なかったが、今回の話し合いでは次のような論点が抽出されたと思う。

- ・なぜ同じクラスの授業を別々の教師が担当するのか？(←おそらく、大きな理由は、非常勤講師の出講日をばらばらにしないため。)
- ・教科書は別々か、同じか？(←同じである確実なメリットは学生の出費が減ること。)
- ・担当教員はネイティブと日本人が1名ずつか、日本人2名か。
- ・教員間で役割を分担するか(文法と会話、など2系列)、リレー式か(教科書を前から順番に進める1系列)。
- ・連絡方法は、学校備え付けのノートか、Emailか、インターネットのサイトの利用か。(ノートだと当日まで進度がわからないが、ペアの教師の報告がぎりぎりならば、同じである。メールよりもノートの方が、全体を確認しやすい。)
- ・どこまで綿密に連絡を取り合うべきか。(複数の授業の連絡をすると時間がかかる)

【テーマ2】2013年度の活動の計画—所要時間20分の教案を作る企画

テーマ2について：「教師の集い」では、来年度、「20分を1ユニットとして授業を行う教案」を参加者の間で作って行くことになった。これについて出席者で意見を出し合いながら、柿原さんの提案をやや修正し、次のような方針で4月から実施する方向でまとまった。今後も実施方法を探りながら、とりあえずスタートすることとなった。

1. 目的 ①TADESKAのメンバーが協同で「形のあるものを作っていく」

②他の教師の授業の仕方を互いに見て自分の授業の参考にする

2. テーマ 担当者が決める

(日本人教師の場合おそらく初級文法だが、基本的に自由。テーマの重複可)

3. 手順 ①担当者が模擬授業を準備 (パワーポイントの提示物と教案)

②模擬授業の実施

③出席者の間でコメント

④担当者がコメントを参考に修正

⑤アーカイブ

3. 共通事項

①模擬授業 (20分程度) の実施 →出席者とのやりとりで改良

②アーカイブしていくもの：

1. パワーポイント (学生に提示するもの：図表、例文など)

★パワーポイントを授業で使わない教師も多い。その場合は模擬授業時に板書したものを撮影して、パワーポイントに貼り付ける。

2. ドキュメント (Word もしくは PDF?)

当該パワーポイントを用いた教案

3. 模擬授業を録音したもの (必須ではない)

③注意 (ドキュメントにも明記)：

1. そのユニットの「ねらい」を明確にする (何を実現したいのか)

2. 提示内容の根拠となるものを簡単に示す

(例：準拠する教科書や参考書、文法や教授法の理論など)

3. その模擬授業で想定する、学習者らの既習事項を示す

(例：比較級をテーマとする場合、過去形は既習かどうか)

4. どのように授業をしていくか

★テーマによって時間調整の方法が異なると思われるので、

①内容提示 (説明)、②学生のアクティビティ、③ドリルなどの配分は担当者に任せる。

4. アーカイブ方法

- ・パワーポイントとドキュメント
ドロップボックス(?) →懸案 (Yahooのサービスを検討)
- ・音声ファイル (ネット上だと重い)
USBで保管 →誰が? (世話役?後に必要になった時に聴く)

5. その他

GIDE (スペイン語教育研究会) のメンバーが、現在作成中の「スペイン語学習のめやす」に準拠した模擬授業をするために参加する可能性がある。

話し合いの中で出た意見:

- ・いきなり文法説明をするより語彙から導入する方がよい。→担当者に一任
- ・オリジナルの提案 (柿原さんの提案) では教科書に依存しない、ということだが、既存の教科書に従った教案の方が、既習事項の扱いがしやすい。
→何に準拠するかは担当者に一任するが、想定する既習事項を明示する。
- ・パワーポイントを使っていないのに、TADESKAの教案でパワーポイントを使うのは自分にとって実用的ではない。
→アーカイブの方法を統一した方がよいので、その場合は模擬授業で板書したものを撮影し、パワーポイントに入れる。
- ・まずは、多くの人が担当しやすいように、柔軟なルールで活動をしていく。
- ・ドキュメントとパワーポイントだけでなく、録音をしておく、と、いつか役立つだろう。→担当者が了解すれば録音する。

4月以降の担当者

- 4月6日 小川雅美 (名詞句あるいは発音)
- 5月11日
- 6月1日
- 7月中旬 講演会の予定 (Graciela Vásquez氏: 7/16-7/22 日本滞在)
- 9月7日 鈴木真由美 (語順←学生からの質問が多いので)
- 10月5日 土屋亮 (未定)
- 11月2日 長瀬由美 (未定)
- 12月7日

番外編 (TADESKAが時間切れだったので、その後の昼食時に)

- ・CEFRから「スペイン語学習のめやす」作成までの大きな流れの説明
- ・2月23日のミニシンポジウムの報告

以上